Osaka University Knowledge Archive

Title	非対称紛争の構造と管理戦略 : イスラエル・パレスチナ及びレバノンを中心に
Author(s)	辻田, 俊哉
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59257
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【1】

氏　　名	辻　田　俊　哉（つじ　た　とし　や）
博士の専攻分野の名称	博　士（国際公共政策）
学　位　記　番　号	第　２４９５４　号
学位授与年月日	平成23年９月20日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 国際公共政策研究科国際公共政策専攻
学　位　論　文　名	**非対称紛争の構造と管理戦略** **ーイスラエル・パレスチナ及びレバノンを中心に**
論文審査委員	（主査） 教　授　星野　俊也 （副査） 教　授　松野　明久　　教　授　真山　　全

論文内容の要旨

本稿では、国家と非国家主体による非対称紛争の特徴を分析し、紛争管理の諸戦略を考察することにより、非対称紛争という紛争形態の実態と管理課題を究明することを目的とする。本稿の特徴は、同じ非対称的構造を有する紛争形態でも、非国家主体の動機と能力の違いにより、国家と非国家主体間における戦略論理の非対称性の度合いが異なる点に着目し、戦略論理の非対称性の高低により、紛争の実態と管理課題が異なることを示したことにある。

本稿の構成は、第１章と第２章における理論的考察と第３章から第５章に亘る事例研究との二部からなる。

第１章では、非対称紛争の特徴を力関係と地位が非対称的な構造に起因して戦略論理が非対称的である国家と非国家主体間において生ずる武力を用いた紛争の形態、と位置付けた後、紛争当事者間における非対称性の度合いを左右しうる要素について検討する。その際、先行研究の検討から非国家主体の目標の性質、組織構造の形態、活動拠点の形態を分析し、これらの要素が紛争当事者間における戦略論理の非対称性に及ぼす影響について説明する。また、戦略論理の非対称性の度合いから非対称紛争を三つのタイプに分類することにより、紛争の実態の解明を図る。

第２章では、戦略論理の非対称性の高低という分析視点から、非対称紛争の管理戦略を考察する。まず、非対称紛争において管理が困難となる要因の一つとして、紛争当事者間において「相互の手詰まり状態」よりも、力関係と地位の非対称的な構造に起因して、当事者が単独行動を選択する傾向が強い「膠着状況」が発生しやすい点を指摘する。次に、一方的（優位な主体による抑止などの強制と予防などの制御）、双方（交渉）、第三者（仲介）、それぞれの管理戦略の特徴と問題点をあげる。最後に、事例研究において紛争管理が困難となる要因と管理課題を見出すため、非対称紛争における三つの負の循環に関する分析枠組みを提示する。ここでは、長期化する紛争における膠着状況の段階を、①交渉をめぐる循環、②暴力応酬の循環、③紛争激化の循環、に分類し、膠着状況の各段階における紛争当事者間の相互戦略とその問題点を説明する。その後、第１章で提示した紛争の類型に応じておいていかなる負の循環が見出されるのかを示す。

第３章から第５章においては、紛争当事者間における戦略論理の非対称性の高低と膠着状況における負の循環に関する分析枠組みを用いた事例研究を行う。第３章では、イスラエルとパレスチナ諸派との紛争を事例とし、イスラエルとパレスチナ解放機構による1993年の「オスロ合意」から、暴力が激化した2000-05年までのアル・アクサー・インティファーダを中心に考察する。考察を通じて、和平プロセスにおける非対称的な構造に起因する諸問題と暴力が激化した要因を明らかにする。

第４章では、イスラエルとパレスチナ諸派の中でもハマースとの紛争を中心に、イスラエル・パレスチナ情勢を考察する。事例の対象期間は、イスラエルによるガザ地区の一方的撤退後からガザ紛争後の2005-10年とし、紛争当事者間における戦略論理の非対称性の高低差が顕在化した過程を分析する。

第５章では、イスラエルとレバノンを活動拠点とするヒズブッラーとの紛争を扱う。考察の主な対象期間は、2000年のイスラエルによるレバノンの一方的撤退から、2006年のレバノン紛争を経た2010年までとする。ここでは主に、レバノン紛争前後の非対称的な主体間における脆弱な抑止の均衡に基づく「ゲームのルール」の変容と継続性について検討する。

終章では、各事例において見出された紛争管理が困難となった要因を整理する。また、事例の考察から導き出された政策的含意として、各タイプの紛争におけるそれぞれの負の循環に応じた管理課題を提示し、紛争当事者間における戦略論理の非対称性の高低が紛争管理に及ぼす負の影響について論じる。

論文審査の結果の要旨

本博士号請求論文は、グローバル化や情報通信技術の発展により、国際情勢が大きく変動するなかで顕在化している国家と非国家主体の間の「非対称紛争」に焦点を当て、その実態の解明と管理戦略の在り方について公共政策の観点より、理論的考察と事例研究とを組み合わせて分析するものである。本研究では、特にイスラエル・パレスチナ及びレバノンにおける非対称紛争を取り上げ、非国家主体の動機と能力の違いによって、対立する国家と非国家主体との間の戦略論理の非対称性の高低が生じることから、それぞれの紛争の実態に見合った管理方式を見出すことの重要性が指摘されている。

具体的には、第1章では、非対称紛争の特徴を、力関係と地位が非対称的な国家と非国家主体の間の紛争、言い換えるならば、現状維持を追及し、直接戦略を取る国家主体と現状変更を求め関節戦略を取る傾向の強い非国家主体という、異なる戦略論理をもった主体の間で生じる武力紛争の形態、と位置づけたのち、非国家主体の側の特徴（達成目標が実体的か仮想的か、組織形態がヒエラルキー型かネットワーク型か、そして活動拠点が実効支配型か「統治なき地域」型か）の違いにより、国家主体との紛争の形態が３つのタイプに分けられることを明らかにし、第三者主体の関与の可能性にも言及し、それぞれの紛争に対する管理の在り方について議論する。

第2章では、戦略論理が非対称の国家と非国家間の紛争を管理するにあたり、なぜこうした非対称紛争では主体間で長期にわたる膠着状態が発生しやすいのかを検討し、主体間に「交渉をめぐる循環」、「暴力の応酬の循環」、「紛争激化の循環」という３つの負の循環プロセスに陥る傾向があることを指摘しつつ、第1章で提示した３つのタイプの非対称紛争の態様と組み合わせ、紛争構造と管理戦略上の課題を明らかにしている。

第3章から5章は事例研究である。第3章では、イスラエルとパレスチナ解放機構との間でオスロ合意（1993年）が結ばれたものの、アル・アクサー・インティファーダ（2000-05年）で暴力が激化していった背景を、第4章では、イスラエルとハマースの間でガザ紛争が緊迫化（2005-10年）していった状況を、そして第5章では、イスラエルとヒズブッラーとの対立でレバノン紛争に発展（2000-10年）した経緯を説明する。それぞれタイプの異なる３つの事例に関し、いかなる力学で負の循環が発生し、事態が膠着し、紛争の解決が妨げられたのかが明らかにされる。以上の事例研究を踏まえ、終章では、当面する紛争のタイプを見極め、紛争のサイクルから抜け出すため、国家主体・非国家主体・第三者主体のそれぞれがどのような管理戦略や仲介戦略を取るべきかが検討される。

本論文は、決してイスラエル・パレスチナ紛争の「解決」策をもたらすものではないが、多くの犠牲を伴う悲惨な紛争の「管理」に向けて当事者と国際社会が着目すべき力学や要素や課題を明らかにした点で有益と言える。

本論文は、当研究科での修士論文としての研究をベースに博士課程における丹念な先行研究の渉猟と理論的な枠組みの構築と右枠組みに基づく事例研究などの地道な積み重ねの成果であり、その研究の主要な部分は査読付きジャーナルや権威ある国際政治学会での報告実績を経て磨きをかけられた労作であると判断し、審査委員会は一致して本論文が博士（国際公共政策）の学位を授与するに値すると認定した。